

イザヤ書26章3-4節 「全き平安」

1A 救いと信仰の町 1-2

2A 主への信頼 3-4

1B 堅固な志

2B 全き平安の守り

3B とこしえの岩

本文

イザヤ書 26 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、23 章まで来ました。本日は、24 章から 26 章までを読んでいきます。今朝は、26 章 3-4 節に注目したいと思います。

3 志の堅固な者を、あなたは全き平安のうちに守られます。その人があなたに信頼しているからです。4 いつまでも主に信頼せよ。ヤハ、主は、とこしえの岩だから。

私たちは前回、「恐れという賜物」という題名で、私たちが抱く恐れについて学びます。平穏で安定したところに、動揺が走るような出来事が起こることは、その時に祈りによって主の前に出れば、かえって心と思いが清められて、御心を選び取ることができるようになるという話をしました。恐れが主から出ているという表現が、22 章 5 節にありましたが、不安定なこと、不確定なことが多いこの世の中で、神は積極的にそうした否定的なことに関わってくださり、私たちは積極的に取り組むことができることを話しました。今朝は、そうした不安や不確定なものに面しても、それでも心に置かれている、神の平安について学びます。実に、「**全き平安のうちに守られる**」と書かれています。

1A 救いと信仰の町 1-2

この全き平安が、どこから出ているのかを知るために、前の二節も読んでみましょう。「1 その日、ユダの国でこの歌が歌われる。私たちには強い町がある。神はその城壁と塁で私たちを救ってくださる。2 城門をあけて、誠実を守る正しい民をはいらせよ。」強い町があって、その中にいるので神の救いを得ている。それで、全き平安の中で守られているということです。

24 章からのイザヤ書は、世界的な、宇宙的な世界の終末の預言となっています。地球の表が全て揺れ動き、それで地上の住民は極端に減ることになります。しかし、主イエス・キリストが再臨されて、ご自身がエルサレムで輝く王になることが約束されています。「24:23 万軍の主がシオンの山、エルサレムで王となり、栄光がその長老たちの前に輝くからである。」とイエス様が王となります。そうすることによって、世界中に神の救いが広がります。そしてここ 1-2 節に書かれているのは、そのエルサレムの姿です。イエスが王となっていること、これが人々が平和の内に守られることの第一前提です。

私たちは、イエス様を自分の主、自分の王とすることによって、全ての状況で明け渡すことができますね。私たちの心に不安がよぎるといのは、自分で状況を掌握できないからだと思うからです。自分の願うように、思い通りに事が運ばない時に、心に不安が生じます。私も一昨日、財布をなくしました。確かに、カバンに入れたはずだと思ったものが出てこなかったのです。祈りながら探しました。そして見つかりました。その間、それでも主がすべてを掌握されているということ、信仰を持って受け入れていれば、さほど心が揺るがなかったと思います。不信仰でした。主が王となっていれば、そこには敵からの救いと平安が満ちます。

そして 25 章において、イエス様がこの地上で王となられた後の神の国の姿をイザヤは描いています。そこには、すばらしい祝福に満ちた宴会があるとあります。「25:6 万軍の主はこの山の上で万民のために、あぶらの多い肉の宴会、良いぶどう酒の宴会、髓の多いあぶらみとよくこされたぶどう酒の宴会を催される。」すばらしいですね、ここには世界からのあらゆる人々が集まって、主ご自身が主催者となられて、ごちそうを食べながらの祝会となります。喜びと楽しみに満ちています。

私たちは、キリストを王とすることによって、一致をする、交わりをするという喜びがあります。「ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。(ルカ 15:10)」私たちは、このことで教会が一致し、教会間も一致しますね。誰かがイエス様を受け入れたら、それまで何かおしゃべりをしていた人も話をやめて、共に手を叩いて喜ぶはずです。セレブレーションの大会では、何百人が毎回ステージの前に降りていって、私たちの心は楽しみと喜びで満たされました。このように、神の救いにはキリストにある交わりと一致があり、そこに平和があります。

そして、その神の国の中で、神ご自身の住まわれる都があることを 26 章は教えています。もう一度読みますと、「神はその城壁と塁で私たちが救ってください。」とあります。古代における町において、城壁と塁は何にもまさって、自分たちを守る救いとなっていました。エルサレムはこの時、アッシリヤが包囲しようとしている中で、城壁と塁が耐えられるのかという恐れがあったのです。この前の学びではその覆いが取れてしまったことが書かれています。

私たちにとって、主が城壁と塁で私たちが救ってくださいと言われても、ピンと来ませんね。日本人の私たちに分かり易く例えるなら、「主が私たちが年金によって救ってください。」となるでしょうか！年金？そんなの頼りにならない！と思われるかもしれません。そうです、エルサレムの住民によって城壁と塁がアッシリヤの攻撃に耐久できるとは到底思えなかったのです。しかし、とてつもなく確かな年金、将来の生活設計も確実に立てられる安定した年金給付が保証されているとすれば、それは私たちが安心させるのではないのでしょうか？私たちを確実に守る、その保証が与えられることによって、私たちは平安を持つことができます。

救いについて、私たちに保障を与えている約束は、テサロニケ第一 5 章にあります。「5:23-24 平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来

臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだは完全に守られますように。あなたがたを召された方は真実ですから、きっとそのことをしてください。」確実に与えられる保障です。私たちは聖めを通して、神の永遠の命の中に入ります。しかし、私たちは時に汚れの中に戻ってしまいます。失敗してしまいます。しかし、主は恵みによって立ち直らせてくださいます。神の前にへりくだり、悔い改める中で、御霊が新たな力を与えてくださり、再び主によって歩むことを許してください。そうしているうちに、主が私たちを聖めてくださり、そして来臨の時には、霊も、魂も、体も完全に守られるように、責められることのないようにして下さる、というのです。それは私たちの忠実さにかかっているのではなく、神の真実にかかっています。

そして、「城門をあけて」とあります。城門は、敵が中に入ることないようにする、極めて重要な役割です。神殿においては門番をレビ人が行ない、そこに汚れた者が入らないように見張っていました。このように、入れる者と入れない者の区別を城門の番人は行うのです。その入れる資格は何なのか？「誠実を守る正しい民」とあります。ここの「誠実」は、信仰の意味です。信仰と言っても、信仰に満ちている、十分に信頼しているというような意味合いがあります。つまり、神救いにゆだねきっている者、その信頼によって神が恵みによって正しいと宣言しておられる者たち、ということになります。

私たちは、神の救いを信じ切っている者たちになりたいです。私たちは、この人生の道程の中で、神の救い、キリストが罪人を救うためにこられたというご計画の中から出てしまうような誘惑を受けます。他に何かやることがあるのではないかとという疑いが出てきます。あるいは、罪を犯し続け、この恵みの福音が邪魔になることがあるかもしれません。けれども、この恵みに留まるのです。しっかりと神の救いの知らせに留まるのです。その行き着く先が、神の都の城門から中に入ることなのです。ヘブル書 10 章にこう書いてあります。「10:35-36 ですから、あなたがたの確信を投げ捨ててはなりません。それは大きな報いをもたらすものなのです。あなたがたが神のみこころを行なって、約束のものを手に入れるために必要なのは忍耐です。」最後までこの確信を保つのです。私たちが集まるのは、まさに子の希望の中に留まるためです、励まし合って、愛と善行に促し合おうではありませんか。

2A 主への信頼 3-4

そこで今朝の本文、3 節に入ります。「**志の堅固な者を、あなたは全き平安のうちに守られます。**」

1B 堅固な志

「志が堅固」とありますが、新共同訳では「**堅固な思いを、あなたは平和に守られる**」とあります。一つに思いが定まっていること、それによって平安で守られるとあるのです。これは、明け渡された思いです。委ね切った心です。この都は城壁で取り囲まれている訳ですが、何もないのどかな田園風景が平和ではなく、恐怖が近づいている中でも得られる平安であります。それは、私たちがどんなことがあっても、主に明け渡してしまった心によって、そこに留まっている平安であります。

その明け渡しを、最も知ることができるのが、主が十字架の上で息を引き取られる最後の言葉です。イエス様は大声で、「父よ。わが霊を御手にゆだねます。(ルカ 23:46)」と叫ばれました。ちょうどそれは、サーカスの人がブランコで、相手が受けとめることを信頼して、ブランコから相手のブランコに飛んでいくようなものです。あるいは、「俎板の鯉」という日本語の表現もあるでしょう。相手を全き信頼をもって信頼し、自分を明け渡ししてしまうことです。イエス様は父なる神に完全に信頼した結果、十字架にあるとてつもない苦しみの中にあっても、なおのこと平安を保っておられました。

イエス様が、十字架に付けられる時の罵りは、このようにして父なる神にゆだねておられました。「1ペテロ 2:23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。」罵られても、苦しめられても、それで自分に何か悪いことがあるのではないかなど、そんな詮索はせず、正しく裁けるのは父なる神だけだとして、相手を愛することのみに集中しました。そして、私たちは終わりの日に生きています。間もなく神の裁きが来ます。ですから、自分たちが苦しみを受けても、自分で仕返しをするのではなく、神の裁きに任せます。「1ペテロ 4:19 ですから、神のみこころに従ってなお苦しみに会っている人々は、善を行なうにあたって、真実であられる創造者に自分のたましいをお任せしなさい。」

私たちは、ヤコブの御使いとの格闘、あるいはイエス様のゲッセマネの園における祈りが必要です。主の力強い主権の下に、自分の強い意志を降ろすのです。強く反発する意志を降ろします。そして降ろした後は、どんなことがあっても平安です。状況は変わっていないかもしれませんが。しかし、変わっているのは自分です。その自分は強くされています。イエス様が侮辱を受けた時、とても強くなっていることが、イザヤ 50 章 7 節に書いてあります。「しかし、神である主は、私を助ける。それゆえ、私は、侮辱されなかった。それゆえ、私は顔を火打石のようにし、恥を見てはならないと知った。」

2B 全き平安の守り

そして、「全き平安」の中で守られるとあります。このヘブル語は、平安が複数形になっているそうです。「平安、平安」と書かれています。単に平安なのではなく、全き平安です。ヘブル語ではシャロームという言葉ですが、日本語には便利な使い分けがあります。「平和」という言葉があり、そして「平安」があります。私たちは、神との平和があります。そして神の平安があります。これは二つ、別のものです。

神との平和について、ローマ 5 章 1 節が教えています。「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」私たちが罪を犯している時は、それは全知全能の神に反逆していることを意味しているに他なりません。ですから、神と敵対関係にあるのです。神と戦争をしています。したがって、当然ながら正しい神、義なる方から制裁を受けます。それが、神の怒りと呼ばれます。生まれながら神の御怒りを受ける子である

と、エペソ 2 章 3 節にあります。しかし、その御怒りを御子ご自身が受けてくださいました。その罪の供え物によって、神の怒りは満たされました。それゆえ、神は私たちに対して、キリストにあって敵対するべきものは抱いておりません。神と平和を持つことができました。これは、驚くべき福音です。私たちに深い安堵を与えます。

そして、これとは別に神ご自身の平安が私たちの心を満たす、神の平安があります。「ピリピ 4:6-7 何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」私たちは、神と敵対関係になり、神と平和を保ちながら、神の平和を心に持っていないことがあります。先ほど話したように、自分で掌握しようと思ってしまうからです。主が掌握されていることを認めて、心を明け渡し、委ねることによって、私たちの中に神の平和が満ちます。

全き平安の模範として最適なのは、嵐の舟の中でぐっすり眠っておられたイエス様の姿です。「ルカ 8:23 舟で渡っている間にイエスはぐっすり眠ってしまわれた。ところが突風が湖に吹きおろして来たので、弟子たちは水をかぶって危険になった。」この後で弟子たちがイエス様を起こし、イエス様は嵐をしっかりとつけて、嵐が収まりました。けれどもイエス様が、「あなたがたの信仰はどこにあるのです。」と叱りました。ここで弟子たちは、イエス様が嵐を静める力を持っているのに驚いていますが、本当に注目しなければいけなかったのは、嵐の中で眠っていることのできる平安だったのです。イエス様は、父なる神に拠り頼んでいました。そして、向こう岸に渡ろうと言われていたのです。ですから、嵐が来ようが、何が来ようが、平安でいられたのです。その平安が、安眠という形に表れていました。ダビデがアブシャロムの率いる軍が負い迫ってきた時、それでも安眠できたことを書いています。「詩篇 3:5-6 私は身を横たえて、眠る。私はまた目をさます。主がささえてくださるから。私を取り囲んでいる幾万の民をも私は恐れない。」

私たちは前回、恐れが祈りによって勇気になるということを学びました。それは、主との交わりによって、自分の心が主に明け渡されることによって、その平安が心に入ってくるからに他なりません。そうすると、主の視点から物事を眺めることができます。主が何かをしておられることを、それが具体的に何かが分からなくても、知っています。したがって、そこで何かをしようと急ぎ立てられることはないのです。主の前に静まることができます、心を騒ぎ立てることがなくなります。自分は主にあって大観することができます。ある姉妹がこう言いました。「何もしない、主を待つ！」その通りです。そして、主が何とかするのだから、私たちには無くなったり、崩れ去ったり、秩序をなくしたりしているように見えても、主の恵みのみが大事なので、それを無理強いして何とかまとめようとしなくなります。自分は、主が自分の中で、また自分の周りで何をしているのか、その作品を後で眺めることができるのです。

3B とこしえの岩

そして4節をもう一度見ましょう。「いつまでも主に信頼せよ。ヤハ、主は、とこしえの岩だから。」主が約束されている事からは、一時的なものではなく、とこしえに続くものです。「とこしえの岩」と言っていますが、岩というのは不動のもの、そして自分を守るものです。ずっと動かないので、自分がそこに隠れて安心することができます。その不動が永遠に続く方だということです。ですから、変わりなくあるその存在に、いつでも信頼しようというのがここで言っている箇所です。

私たちには、とこしえの救いが保障されています。「ヘブル 10:12-13 しかし、キリストは、罪のために一つの永遠のいけにえをささげて後、神の右の座に着き、それから、その敵がご自分の足台となるのを待っておられるのです。」キリストがただ一度、二千年前に死なれたことは、それは永遠の罪の赦し、永遠の聖め、そして永遠の救いを与えるためのものです。だから、全き平安が与えられます。もう、この完成された救いに付けたすことはないのです。どんな人でも、宗教でさえ、得ることのできなかつた全き平安、どんな修行をしても得ることができなかつた全き平安、救いを全うされたキリストにあって、たった今、手にすることができます。